

子どもを権利の主体（一人の人間）として捉える

子どもは一人の人間であり、独自の存在としての権利を有していることは、教育・保育の最も重要な前提となります。このことは、「児童の権利に関する条約」などに示されています。

- 生まれたばかりの乳児から、子どもは権利の主体であり、言葉にはなくても内々の思いがあります。保育者には、その声を聞き取り、一人ひとりの人格を尊重することが求められます。
- 子どもの人権に配慮し、子どもの最善の利益を考慮した教育・保育の実践は、保育者一人ひとりの人間性や倫理観、職務及び責任の自覚が基盤となります。また子どもを権利の主体として捉える姿勢を積極的に発信し、保護者・地域と共有していくことは保育者及び園の重要な役割です。

子ども一人ひとりに対する理解を基盤とする

子ども一人ひとりを理解し、応答的に関わっていく中で、子どものよさや可能性を捉えていくことが、教育・保育の実践のあらゆる場面での起点となります。

- 子ども一人ひとりと触れ合い、心を通わせながら、愛情をもってその思いや考えなど心の動きや心身両面の育ちを理解し、遊びや生活の中での子どもの姿の変容を捉えることが基本となります。
- こうした「子どもの理解」に当たっては、保育者自身の枠組みや視点を自覚すること、子どもと保育者の関係の中で理解すること、子どもを多面的に理解することが重要です。また、子どもがどのように育ってきたのか、これからどのように育とうとしているかといった、過去・現在・未来をつなぐ、長期的な視点からの理解も必要となります。



環境を通して教育・保育を行う

子どもは、乳児期からその生活において、安心感を基盤に、自ら興味をもって主体的に、周囲の様々な人やもの、事柄といった生活の中で出会う全ての環境に関わることを通して、人への信頼感を育み、学び、成長していきます。

乳幼児期の教育・保育は、この時期の特性を踏まえ、子ども自身がその世界を生き生きと広げていくことができるよう、環境を通して行うことが基本となります。

- 実践に当たっては、子どもの自発的な活動としての遊びを通じた総合的な援助・指導を中心とし、一人ひとりの発達の特성에応じて行っていくことが重要です。
- 子どもが園生活において安心感をもち、意欲的に周囲に関わっていくためには、健康や安全が守られていること、安定した情緒の下で自己を発揮できるよう保育者との信頼関係に支えられていることが欠かせません。
- 周囲との関わりを通じて、子どもの園生活が充実したものとなるためには、子どもの発達に即して主体的・対話的で深い学びが実現するものとなっているかを捉えていくことが大切です。



身近な環境に関わる、感じる、考える

育みたい資質・能力、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を意識する

乳幼児期の教育・保育は、「生きる力」の基礎を育てていくものです。そのために、「どのような力を育むか」、「それぞれの子どもに生まれつつある力はどのような観点から捉えていくことができるか」について認識を共有し、それぞれの子どもの個性や発達の特性に応じて実践していくことが重要です。

- 「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力（「育みたい資質・能力」）は、子どもの自発的な活動としての遊びを中心とした教育・保育の中で、一人ひとりの発達の特性に応じて、一体的に育むことが重要です。
- 「育みたい資質・能力」が育てられている5歳児後半の姿である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」については、発達の方向性を示すものです。このことを意識しながら、子どもたちの「生きる力」の基礎を育てるような教育・保育の環境づくりや、多様な体験が関連し、発達に即して主体的・対話的で深い学びの実現につながるように実践に取り組むことが求められます。

- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を教育・保育の関係者間で共有し、質の高い乳幼児期の教育・保育を実践していくとともに、これを手掛かりに、小学校教育との円滑な接続を図っていくことが重要です。

保育者が主体性を発揮する

乳幼児期における教育・保育は子どもと保育者の関係の中でこそ行われるものです。このことから、保育者は子どもの主体性を尊重するための専門性が求められるとともに、自分自身も教育・保育の主体と言えます。

子どもは保育者との信頼関係に支えられながら、子どもたち自身で遊びを発展させていく中で、様々な体験を重ね、達成感を味わっていきます。こうした経験を支えるためには、保育者自身が生き生きと保育を楽しみながら、主体性を発揮し、専門性を高めていくことが大切です。

- 保育者は、自身のもつ「子どもによりよく育ってほしい」といった思いや願いが、子どもの主体性をさらに伸ばすものとなるよう配慮しながら、子どもの経験が豊かなものとなるよう、環境を構成していくことが重要です。
- 調理職員など園の様々な職種を含めた全職員が願いや思い、認識を共有し、協働して教育・保育を実践していくことが求められます。さらに、保護者や地域とも子どもへの互いの願いや思いを共有し、教育・保育を充実させていくことが保育者には求められます。
- 様々な人々に見守られながら、子どもが自己を十分に発揮し、乳幼児期にふさわしい園生活を送っていくためには、保育者の専門性に基づく、一人ひとりへの丁寧な関わりが必要となります。保育者は、環境との出会いの中で子どもが自発的に始めた遊びを見守るとともに、発達に必要な経験が得られるよう、状況に応じて一緒に準備をしたり、一緒に考えたりするなどの援助を行うことが求められます。

コラム：発達のプロセスを捉える基本的な視点

※「第2回乳幼児期の教育・保育のあり方検討会（令和3年1月開催）」無藤隆委員発表内容を中心に記載を構成しています

教育・保育の内容を考え、実践を進めるに当たっては、子どもの発達を理解し、捉え、見通しをもつことが基盤となります。各園で子どもに育みたい力に対して、その時期や状況に応じた経験に思いを巡らせ、それにふさわしい環境や援助を想定（計画）しながら保育を進めていく（実践・評価）上で、子どもの発達のプロセスを捉え、見通しをもつことが欠かせません。その際、参考となる視点を以下に示します。

《発達とは》

- ◎ **自然な心身の成長に伴い、自ら周囲の環境とかがわりあう中で、生活に必要な能力や態度などを獲得していく過程全体が「発達」である。**
 - ◆ 子どもは、保護者や保育者など、身近な養育者とともに過ごし、互いに関わり合う中で影響し合い、発達していく。
 - ◆ 発達を捉える上では、特定の年齢で何ができているかどうかではなく、いろいろな面の発達が、どのように変化してきているか、それぞれがどのように関連しているかも含めて、育ちゆく過程全体から見るのが重要である。

《乳幼児期の発達と学びの概要》

- ◎ **子どもは身近な大人の受容的・応答的な関わりから安定した関係が育ち、この関係を基盤とした安心感に支えられ、自分の周りの世界に関わる行動を広げながら育っていく。**
 - ◆ 乳幼児期には、探索し、自分から様々なものと関わることで、その反応や影響から学ぶとともに、人との関わりの中で、自ら多くを学ぶ。
 - ◆ 特に、遊びは肯定的な感覚の中で様々なことを柔軟に異なるやり方で行えるようになることを助ける。
 - ◆ 子ども自身が遊びの中で見たり、聞いたり、試したりしながら学びを深めていく上で、共に過ごす大人や年長者による様々な関わり（手助けや導き、見守りなど）は重要な役割を果たす。
- 子どもの気質やごく幼い時期からの育ちなどの違いから、一人ひとりの発達の筋道のたどり方は（これまで考えられていたよりも）多様である。

- 0・1歳のころは、人への基本的な信頼感を育みながら、主に身体の諸感覚を働かせ、直接感じることを中心に、人の顔を見分けるなど身の回りの基本となる物事や人間関係についての理解の発達が始まる。
- 2・3歳くらいから、見立てたり振りをしたり、また以前のことを思い出したりなど、目の前にないことをイメージできるようになっていき、それまでとは違う発達の広がりが見られるようになっていく。
- 幼児期には、身の回りの大人、年上の子どもやほかの子どもたちとの関係を中心に、社会・文化との関わりが大きくなり、様々なことへの好奇心と学びが大きく広がる。こうした人との関わりの中で、周りの物事とともに、周囲の信頼できる人の振る舞い、言葉、会話を通じて様々なことを自ら学ぶ。
 - ◆ 子どもは「なぜ」という問いかけによって、自分の前に広がる世界についての情報を得ようとし、さらには物事の因果関係を知ろうとする。こうした質問を繰り返すことを通じて、多くのことを学んでいく。（おおむね3歳頃から）
 - ◆ 乳児期の後半（9～10か月頃）から、相手が困っているとわかったら助けるといった思いやりの気持ちが育ち始め、3歳から6歳くらいにかけて徐々に園での遊びや生活での決まりや約束事を理解し、さらに自分たちとしてそうしたルールを変えたり、作ったりするようになっていく。
- 幼児期後半（4歳から6歳ころ）には、自分の気持ちや考えをコントロールする力が大きく発達する。
 - ◆ 自分をコントロールする力には、他者とのやり取りを通して交渉する能力、自分の感情を管理する能力、目標を達成する能力などが含まれる。
 - ◆ 目標を達成するために、自分の気持ちを収めたり、考えを集中させたり、切り替えたりする能力は幼児期に特に発達する。
 - ◆ 幼児期の終わりに向けて、欲求をその場面に応じて抑えたり、後回しにしたりする力が発達する。さらに欲求を抑えるための工夫やついやってしまう行動や思い込みを場面によって変えていくことが5・6歳になるとできるようになっていく。
- こうした発達の特徴から、小学校以降は、より集中的で自覚的で効率的な学びへと向かい、思春期を経て、成人期の成熟へと向かっていく。

2 実践の視点（例）

教育・保育を行うに当たっては、子どもの発達を理解し、その過程を捉えることが前提となります。その上で、実践に取り組む際の視点を明確にし、園全体で共有していくことで、子どもの経験が豊かになっていくとともに、保育の手ごたえが生まれていきます。また、園が保護者や地域とともに子どもを育み、その育ちをつないでいくことで、一人ひとりの子どもの育ちを総合的に保障していくことが可能になります。

本章では、それぞれの園が実態に応じて教育・保育を実践する際の、具体的な視点を示しています。

（1）大切にしたい子どもの経験

0歳児の保育

◎ 0歳児の保育では、愛情豊かな、受容的・応答的な関わりが基本となることを踏まえ、以下に示す視点を参考に、教育・保育の実践を進めていきます。

《0歳児の保育で育みたい力》

- 健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力の基盤
- 受容的・応答的な関わりの中で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基盤
- 身近な環境に興味や好奇心をもって関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基盤



じいっと見て、追いかける